

牧師、バイカー、鮫職人として。。。シェア from LA 第72話 「VIP が来たけれど」

「ミッキー先生、スイマセンが今度の火曜の夜、来てもらえませんか？」

50キロほど離れた所で教会運営をしているミノル牧師から電話があった。今から10年前の話。

「え、平日の夜に何やるの？」と聞いたら、「大川先生が来られるんです。」

大川従道牧師は日本のキリスト教会の世界では重鎮で知られる。

「へえ、よくそんなカネあったね〜。彼のようなVIPを呼べるとは。」と思わず口にしたところ、「そうじゃないんです。ウチが呼んだんじゃないで、余裕のある他の教会が招聘されたので、ならばウチにも来て貰おうかなと。それで火曜の夜になっちゃったんです。予算のないウチだけじゃとてもお呼びできないので。」

なるほど、教会では通常、イベントの開催は日曜だが、著名牧師がせっかくアメリカまで来たのだからと急遽やろうと思いついたらしい。当時30代半ばの北野牧師はアメリカに来たばかり。20代に会社勤めを辞め、韓国の神学校に留学して卒業、現地の女性と結婚し、ここLAまでやって来た変わり種。韓国人教会の一角を間借りして日本人向けに教会をしている熱心な牧師さんだ。

しかし、「火曜の夜はアカンわ。俺、明日は仕事で鮫屋に行かないといけない。しかも夜の往復100キロの運転はキツイ。帰宅も遅くなる。スマンけど」と電話を切ろうとしたら、「そう言わずに来てくださいよ〜！お願いしますよう、兄貴い！」などとヤイヤイ言い出した。仕方ないので行くことにしたが、「これだけはハッキリ言うとかで。無理してイベントをやっても近所のクリスチャンが集まるだけ。チョッピリ盛り上がり終わりやぞ。ホンマに神さまを慕って礼拝したり伝道するのではなくお祭りで終わってしまう。俺はイベントを数十年に渡りさんざんやって来たので分かるんや」と釘を刺しておいた。

さて、大川牧師の集会は大いに“盛り上がった”。彼による社会人向けの長めの説教に数百人のクリスチャンが感動し、その後の軽食付きレセプションも賑わったようだ。しかし、神を信じた人、悔い改めに導かれた人はいなかった。言わんこっちゃない。まだある。

「少な！」 集会后、ミノル牧師の奥さんは声を上げた。盛り上がりや人数の割に献金が乏しかったのだ。韓国人教会は伝道や慈善に熱心なので、韓国人の彼女にはショックだったらしい。実際のところ「世界寄付指数」では日本は常に世界最下位クラス、韓国はトップレベルであることは周知の事実だ。そしてこれが日本のクリスチャンの実力なのだ。その後、ミノル牧師は平日の特別集会をしなくなった。

「誰もみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。」

ピリピ人への手紙2章21節

と聖書にあるように、“集まる人”はいるが、仕える人は少ない。それはイエスの時代から何も変わっていない。

ああ、いつになればこの苦々しさから解放されるのだろうか。日本の覚醒を祈りつつ。

